
厨二病少女物語 in,めだかボックス

箱眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

厨二病少女物語 in めだかボックス

【Nコード】

N6078Z

【作者名】

箱眼鏡

【あらすじ】

とある厨二病少女が神に出会い(?)

スキルを貰って原作ブレイクor傍観するお話！

ぶろろーぐ 厨二少女、呼び出す。(前書き)

連載、始めました。

ぶろろーぐ 厨二少女、呼び出す。

やあやあやあ！ はじめまして！ Miss・厨二こと！

『 ちゃんですっ

…え？ 名前が表示されてない？

……………気にすんな。気にしたら負け！ok？

で、本題に入るが…なんか私、真っ白いところにいるんだよねえ？

うん……何でこうなったんだろう。

とりあえず、回想！

そう、それは私がとある怪しい古本屋『BOOK OF』で…

『キツネザルでも出来る！正しい神様の呼び方（初版）』

を買った事から始まった…買う時 可哀想な人を見る目で見られたが。

でだ、家に帰ってその本を見たんだが…

自宅

「よし、メガネ装備完了！ 熟読するぜー！」

とか言っつて本を読み始めたんだよ

まあ、当然の如く『神様の正しい呼び方』があつて試にやったんだよね、手順通りに。

「えー…つとあ？

『付属の魔方陣の描かれている蠟燭を六角形にならべ、その中心に立ち、

「いでよ！」と言っつてから「くぁwせdrftgyふじこーp」を
噛まずに100回唱える』

…くっ…！ やっつてやろっつじゃねエか！…！

で、やったんだよね。

そしたらね…

「いでよー！

くぁwせdrftgyふじこーp

くぁwせdrftgyふじこーp

「誰だツツ！……！」

「神だツツ！……！」

「知らんがな！！ って神！！！？」

「そつだよ！！ 1時間位前からいたよ！

お前がいつまでたつても現実逃避してるからかなり寂しかったよ
「！」

「知らん。どうでもいい」

「どうでも……」

ていうか神イケメンだなオイ……
まあいいか。私の願いが先だっ！

「で？ 神（笑）さんよお……ていうか何時まで落ち込んでんだよ。
鬱陶しいわ」

「誰のせいだ……で……本題に入るけど、お前の願いは転生だよな？
っ！か此処に生きてたまま来る奴って中々いねえよ」

「オイ、ちょっと待てっ！！」

「ん？何だよ」

「今、お前……生きたままつったよな？」

「っ！事はアレか、ここに来る奴は大抵死んでんのか？」

「……………まあ…な…?」

「今の間は何だあ? オイコラ神(笑)さんよ」

「さーて! さっさとやるぞー!」

汗だらっただらやんけ…

「…まさかとは思うけどさ、その死んだ奴って…お前のミスで死んだりとかか?」

「!?!」

おお、ビクッてしたっ

「…ふうーん、へえーえ?そつかあ、そうなんだあ?w」

「う、うるさい! 俺だって、俺だってミスくらいするっつーの!」

ツンデレ…? では無いな。確実に。

「で、此処に来た奴は身元確認をしなきゃなんないから…」

「間違っつて死んだとかそういう事で?」

そう! 私は確信犯!

「グサツ…そうだよ…」

「自分で…」

「ゴホン、気を取り直して…名前は？ちなみに俺は菊だ」

「女子か。私は」 『な』

神が分厚い本を見始めた。重くねえの？

「……お、本人だな。OK OK

で、お前の願いは転せ 「違えよ」 は？」

「私の願いは… 「ちよつと待てよ！」 ンだよ駄神」

「駄神…じゃなくて！ お前の願いは転生のはずだろ！？」

「情報古いな… あんな？ 私はある時、気づいたんだよ」

「何に」

「『あれっ？ 転生しちゃったらしいんな世界行けなくね？』

…という事に。」

「はあああああ？！」

「つー訳で、今の私の願いは

『あらゆる世界に行けるスキル』と『スキルを作るスキル』をくれ。

」

「せこいーーーー！！！！」

「うるせえな！！私はあらゆる事を楽しみたいんだ！！いだろ！！」

「うづうづ…俺ってさ、お前に呼び出されただろ？」

「お？なんだいきなり」

「俺達には決まりがあつて…」

『呼び出された神は 呼び出した者の願いを絶対叶えなければいけない』

…つて言つのがある…から

「叶えてくれんのか？」

「…まあ…でも、お前の願いつて、全時空を行き来するつて言つ事なんだよ」

めんどくせえ言い回ししやがって。めんどくせえ奴だな。

「叶えられるかなあ… みたいな事か」

「うん…という事で、ちょっと大神様に相談してくるわ」

「…何か納得いかねーけど…いいよ」

「おう、ちょっと待っていてく」 『その必要はない』 「!!」

「んあ？」

誰だよ… 美人さんキター… 何で神って美形多いの？
そんなこと思っていると、神（美人）さんが口を開いた

『 菊、テメエ何モタモタしてやがる。おお？』

「口悪っ！…」

ビックリだよ！！ 何！？ めっちゃ口悪い神さんキター！！
口悪過ぎて突っ込んだじゃったよ！！ もう！

「す、すみません…」

「めっちゃビビってんじゃん、チキンハートだなーお前」

「う、うるせえっ」

『オイゴラ、テメエアタシの話聞いてたか？ ん？』

「聞いてましたごめんなさい」

「弱いなお前…」

『！ お前がこの阿呆を呼び出した人間か』

「そっツス」

『ほおーん…お前の願いはー…何だっけ？

あらゆる世界に行けるスキル…と、スキルを作るスキル…だったか？』

「え、何で知ってるんですか?!」

駄神ことお菊ちゃん（笑）が喋りだす。

『お菊ちゃん（笑）… テメエが持ってたのはコレの一個前のだ（笑）』

「お菊ちゃん!?!」

「お菊ちゃん、案外ドジっ子なんだな（笑）」

『で、お前』

「へあはい!?!」

いきなり呼ばれて変な返事しちゃったよ…

『お前の願い、叶えるからな』

一瞬の沈黙。そして…

「…はあっ!!?」「」

叫んだ。

だってビックリしちゃったんだもんっ

『ん? なんだ嫌なのか?』

「物凄く嬉し過ぎて吐きそうです」

『ははは! そうか!』

「ちよつと!! 大神様!? いいんですか!?!」

『いいつつってんだろ? お菊ちゃん(笑)』

「そつだよ。お菊ちゃん(笑)」

「うっ…もういいや…ハハッ…」

お菊ちゃん(笑)が落ち込み始めた。邪魔くせえな。

「つーか、マジでいいんスか?」

『いいんだよ別に。お前気に入ったし』

「よっしゃあああああああああああああああつー!!」

『落ち着け!?!』

「うあつ、スンマセン…つい」

『いや、いいんだがな…』

で、『あらゆる世界に行けるスキル』と『スキルを作るスキル』
はもう使えるからな』

「「いつの間に!?!」」

あ、お菊ちゃん復活した。はええな…神クオリティーがこの野郎

『企業秘密だ。…お、もうそろそろ時間だ。』

「あ、本当ですね」

「? 時間が何だよ」

『ん? お前を下に戻す時間』

「あ」

そーいや忘れてたな…

『会つのは最後になるかもしれないから、アタシの名前を覚えてお
く。』

「アタシの名前は紀樹だ」

「紀樹さん…okッス！ 覚えました」

「お菊ちゃん？ テメエはいいのかー？」

「あんまし言う事ないですし…」

「ンだよ冷たいなー、お菊ちゃん」

「お菊ちゃんはやめてくれっ…！」

「嫌です（笑）」

「じゃ、戻すぞー」

「ご愁傷様…」

「は？」

何？ ご愁傷様？

「…んゝー…？」

…知ってる天井だ… 当たり前か

「あんの野郎共…落としやがって…」

私は根に持つタイプなんだぞこの野郎。

ヒラ…

「あん？ ンだこれ…」

…手紙か…？ つか上から落ちて来たよな…

…上、天井…うわぁ、物凄い無理矢理…

「ええー…と、何々…」

『おはや〇ほー！』

うた りか。地味にネタ使ってくるんじゃねえよ駄神共が。

『ういーっす！ 生きてるかー？』

生きてるわー！！ もう突っ込むのやめとこつ。先に進まねえ

『ははは、言い忘れてた事があつたから手紙で教えるぞ。』

まず、スキルの事。

スキルは現実では使えないからな。

あらゆる世界に行けるスキルの名前は

《ブックワールド》っつー奴に決定したから。

ブックワールドはその世界に行く時に

「ブックワールド！」っつて言えば行けるから

でもう一つの方は《スキルメーカー》。まんまだな（笑）

あと、原作はぶち壊しても、傍観でも何でもいい。

そっちの世界の漫画にや影響しないから。

他になんかあったっけ…？ 無理だ思い出せない。

まあこれでいいか。

p.s. おまけもやったからなー

以上。 from 紀樹

……………ぐっただくだな…！！」

ぐだぐだ…ぐだぐだ過ぎだよ！？

馬鹿じゃねえの！？ 他になんかあったけ…？ て！！
あきらめんなよ！！！！ もう！！
おまけってなんだ！！！！？

「まあいいや」

どこの世界に行くかはもう決まってるんだよねー
やっぱ最初は

「めだかボックスだろ！！うあああ鷗くん可愛い可愛い…！！
という事で！レッツ！！ブックワールド！！」

そして私の原作ブレイクが始まった。

原作傍観するかもしれないけどね。

ぶろろーぐ 厨二少女、呼び出す。(後書き)

はい、無理矢理です。

詰め込みすぎました。切り方が分かりません。

アドバイスください…

頑張って連載します。それでは b y 箱眼鏡

厨二主人公設定だツ！！

現実

名前：不明

性別：女

年齢：13

身長：162.8cm

体重：ご「言わせるかつ！！」^p^

一人称：（基本）私（たまに）あたし、俺、僕

誕生日：不明

性格：言葉で表せない性格、厨二病

容姿：普通な黒髪黒目

in、めだかボックス（容姿はスキルで変えている）

原作開始時

名前：河那カワナツクモ 九十九

性別：女

年齢：黒神めだかと同じ年

身長：165.5cm

体重：不明

一人称：（基本）私（たまに）あたし、俺、僕

誕生日：不明

性格：言葉で表せない性格、厨二病

容姿：肩くらいのショートカットで天パ

カチューシャ 黒をいつもつけている

おまけ：あらゆる事にたいしての才能

神さん設定…

名前：菊（お菊ちゃん）

性別：男

年齢：不明

身長：169.5cm

体重：不明

一人称：俺

誕生日：4/4

性格：「さあ？ しらん「チキンだ」違う!!」

容姿：美形、九十九さん曰く、可愛くもあり格好良くもある

名前：紀樹^{キシュ}

性別：女

年齢：不明

身長：175.8cm

体重：不明

一人称：アタシ

誕生日：12/25

性格：適当

容姿：九十九さん曰く綺麗

以上！

厨二主人公設定だッ！！（後書き）

設定です。

容姿はご想像におまかせっ！！

…しまーす。

第一厨 あれっ？ 何口レビじなってるの？（前書き）

即興で

「駄文です！ ふはw」

では

「どーぞーw」

さっきから台詞ばっか盗んないでくれる？
後、被せるのやm「どーぞー！..!」

第一厨 あれっ？ 何コレとじなってんの？

やあお久しぶり！

今ね、凄いテンパってんだっ！

さっき私、『ぶつくわーると！』 って来たじゃない？
それで何故か

俗に母親と呼ぶべき人のお腹から出て（生まれ？）きちちゃった

ビックリだよね！ で私が更にテンパる事があるんだ！
何かね、私

赤ちゃんになっちゃった

こんな事になるとか聞いてないよ!?! お菊ちゃん!
ていつかもう誰でもいいからこうなっちゃった理由を教えてください!!!

もうホント誰でもいいから教えてーーーー!!!

おはや○ほー! 3歳になった九十九ちゃんだよおー

…エ? 時間飛んだ? 当たり前だろ!?

あんなの見て何が楽しい!?

失礼、ちょっと感情が高ぶった。

で、ふと思ったんだけど

『ごういう事のなくなるスキル作ったらよくな？』

つて、思ったんだ。 ホントだよ？

…まあ、スキルメーカーの存在を忘れてたけど。

あ、一応言っておくけど、スキルもう作ったよ？ いやまじで。

なあーんて事を考えてたら、おかーさんが

「九十九ちゃん！ 入園式に行くわよ」

幼稚園、行けてさ！ 個人的に幼稚園は黒歴史量産所だと思う！！

「つ・く・も・ちゃん！ 早くおいで」

畜生！ 行かないわけにもいかないから行くよもう！
行けばいいんでしょ！ 行けばああ！（ヤケクソ）

「九十九ちゃん！」

「はぁー！ーい！」

畜生…行きたくねえな…

とか考えながら靴を履いてたら

「あら、九十九ちゃん、もう一人でくっく履けるのねえ」

履けるわ！！ 普通履けるだろ！？

「じゃあ、行きましようか」

「うん」

心の中でツッコミながら歩いていたら
まじ天然乙…

「ついたわよ」

「はやあ！！？」

もう着いたの！？ 早くね！？

って、ヤベッ…

「どうしたの？ 九十九ちゃん」

「う、ううん！ ナンデモナイヨ！…？」

馬鹿！！ 何故そこで焦る！！

「あら～そうなの～」

ナイス！！ 天然ナイス！！ 初めてこの人に感謝した！！

『入園式が始まります、親御さんは』

「！ 始まるみたいね～ 行きましようか～」

『これにて、 幼稚園第35回入園式を終わります』

「やっと… 終わった…」

次はあーっとあー…？

「クラス見に行くわよ～」

クラスかッッ！！！！ めんどくさッッ！！

…まあ、行くか…

ひよこ組

ひよこてー!!

0歳位はあれか! たまごか!?

「どんな子が居るのかしらね?」

「優しい子だといいなあ…」

私、人見知り激しいのよ… まじで…

「失礼します」

相変わらずのおっとりした口調でそう言い、
私とおかーさんが教室に入ったら

「あら? 川那さん!」

美人な親御さんがおかーさんに話しかけてきた

…誰っすか?

「あら! 不知火さ〜ん!」

…え？

し
ら
ぬ
い
で
す
と
！
？

第一厨 あれっ？ 何コレどじなってんの？（後書き）

短かったですねー

不知火さん気になりますね

「気になるところじゃねえだろ！？」

あ、九十九さん

…まだ居たんですか？

「お前が一話投稿するごとにできてきてやる！！！」

どうでもいいですが、最終的にこのコーナーあとがき任せますよ？

「まじかよ！！？」

まじです。

では次回よこk

「次回予告！」

不知火との出会い！ そして人外と殺人衝動との邂逅！

次回！

「不知火？ あんしんいんさん？ 殺人衝動？ ンなモン知るかっ
！！！」

乞つご期待！！！」

…予告通りに出来るかなあ…

「まあ…ガンバ」

第二厨 不知火？ あんしんいんさん？ 殺人衝動？ ンなモン知るかッ！！

れんぞくとつじつでぶ> p>

第二厨 不知火？ あんしんいんさん？ 殺人衝動？ ンなモン知るかッ！！

や、やあ！ 唯今二度目のテンパリ中！ 九十九ちゃんだよっ？

うん？ え？ しらぬい？ 不知火ってきゅぽきゅぽ（？）してる

あの、不知火？

落ち着こう、自分、一回落ち着けー？

…… 無理だ！！

いやだって、え？ 不知火って母親いたの？

…いや、普通居るわ。お、おお、大丈夫かな？ 私？

お、お母さん！！ と思ったら不知火母（仮）と

「九十九ちゃん大きくなつたわね」

「そうですか？」

等と駄弁っていた。

若干呆然と立ちすくんでいたら

「あひゃひゃ！」

と、聞こえた。

… A h y a h y a ?

「何ぼつと突つ立てんの？ あひゃひゃ！」

「うおうっ！？」

…ビックリしたー…

「？ 何？ どしたの？」

「うえっ？ あ、いや、ちょっとビックリしちゃって」

「あひゃひゃ！ なるほどね！ あたしは不知火半袖だよ！」

「あ、私は川那九十九… よ、よろしく？」

「ぎもんぶんなんだ？」

「うッ… 人見知りだし…ねえ？」

「！ あらく、半袖ちゃんく久しぶりね」

おかーさんが不知火（娘）に話しかけた
え？ 知り合いですか？

「あひゃひゃ！ そうですね」

ガラッ

扉を開けて先生（？）が入ってきた。

長い奴が始まりそうだあ…

「えく、入園おめでとうございます
」

「ではこれで終わります、明日からよろしくお願いしますね」

「「「「「はーい」」」」」

「はい…」

ヤベエ… 物凄く来たくない…!!

「あひゃひゃ、明日からよろしくね」

「あ…うん…」

その会話を最後に、その日は別れた。

帰り道

「あっ」

おかーさんが何かを思い出したように小さく呟いた。

「お醤油買わなきゃ…」

醤油かよ…

「九十九ちゃん、ちょっとスーパー寄ってもいいかしら？」

「うん、いいよー」

「ありがとう、九十九ちゃんはいいい子ね」

そしてスーパーへ… と思っただけどさあ…
公園が見えちゃったんだよね…

休みたい私はおかーさんに

「おかーさん、あそこの公園で休んでもいい？」

って言っちゃった

まあ、普通は駄目とか言われるけどウチは…

「あら、いいけど…知らない人についていったら駄目よ？」

親が天然だから。

「分かってるよ、じゃあ待ってるから」

「はいはい」

で、公園。

「きゃはははは」

「待て〜！」

微笑ましいなあ…

ってブランコに乗りながら子供達を微笑ましい表情で見ているら

「おや？ 一人でどうしたんだい？」

しらないおねいさんに話しかけられました。

ってか、安心院さん！！？

何故ここに… スーパーの袋を持って…？

「どうかした？」

「あ、いえ…」

何故に？ 何故にここに居るの？

「…」

「う…あ、ええつと…」

沈黙されたッ…！！

キ、キツイ…！

「…ねえ」

「へはいっ!?!」

うわあああああああああ!!!

死にたいいいいいいい!!!

何だよ『へはいっ!?!』てえええ!!!

私は『どこの子?』みたいな事を聞かれるんだろうな

とか思っていたが、

安心m…あんしんいんさんの口から出た言葉は予想外なものだった。

「君、何者?」

「…は…?」

「君が生れた事は知ってたけど、
ここまでの異常だなんて聞いて無いよ？」

何を言っているんだろうか、この人は。
確かに私はスキル持ちだが…

『ここまでの異常だなんて聞いて無い』？

誰が、私の事を、この人に教えた？
誰が 教えた？

…面倒臭い事になってきた…

私はそう考えながら喋り始めた…
私を作ったスキル、詐欺師の仮面を発動させながら。

「…おねいさん、何を言っているんですか？」

あぶのーまるって何ですか？」

…この人に効くじんがいといいが…

「……僕は　　「九十九ちゃん！」　　チツ……」

オイオイ、舌打ちしたよこの人…

「あら、貴女は？」

「この子、一人じゃ危ないと思ったんです。

だから少しでも貴女が来るまで一緒に居たんですよ」

「あら、ありがとうございます？」

「いえいえ、では僕は失礼します…

バイバイ、九十九ちゃん」

「…はい」

あんしんいんさんは帰って行った。

「じゃあ帰りましょうか？」

「あ、うん……」

私は直感した。

『あの人は、じんがい近いうち…また現れる』

…と。

第二厨 不知火？ あんしんいんさん？ 殺人衝動？ ンなモン知るかッ！！

疲れたです。

「結局、Mr・殺人衝動は出てこなかったな」

だって宗像君入れると物凄い長くなると思って…

「…まあ、確かに」

不知火の口調が分からない…

「そこらへんが今後の課題だよな」

うん… 次回予告の気力がなから後、宜しく…

「おうよッ！

次回予告！

（やっと）殺人衝動との邂逅！

そして私は自分の異常さを（若干）自覚！

次回！

「殺人衝動と厨二少女の邂逅！」

乞うご期待！ つか誰が幼女だ！！」

第三厨 殺人衝動と厨二少女の邂逅！（前書き）

僕、もう疲れちゃったよ…

「どしたよ」

お…

「お？」

おもいつかない！！

「えー、どうすんだよ」

ふは… どうしよう

「ま、頑張れ」

僕、頑張るよ… パトラッシュ。

「私は犬か！？」

…そつえば九十九さんが3歳の時って…
宗像君、5歳？

「…？ さあ？」

…誰か教えてくださいっ

第三厨 殺人衝動と厨二幼女の邂逅！

ういす、唯今絶賛暇暇な九十九ちゃんだよー

今日は幼稚園（笑）は休みなさっ！ だから

だりいです。暇です。

状態になっちゃった という事で唯今公園に来ているんでござい
ますよ

公園に来たのはいいんですけどねー
なんか物凄く異常な雰囲気の子がブランコの所にいるんでせうが

どうしたらいいの？

九十九ちゃんチキンだからわからない。

まあ、とりあえず話しかけてみYO！

「あの……」

「！……」

ち、沈……黙……！

中々手強い奴だ……！

「あー…… な、何してるの？」

「……」

うわああああああああああ
何にも喋ってくんない！ どうしよう！

「……あの子達を見てるんだ」

「はへ？」

喋った…… 失礼か。

「……」

「あ、そ、そうなんだ……」

あああああ……！ 自分馬鹿あああ……！！

折角話してくれたのにつ！！ もう！！

「」
「」
「」
「」

…沈黙…辛過ぎて死にそうでふ…

くっ！ こうなったら私の雑魚い会話能力で意地でも会話してやん
ぜっ！

と、とりあえず名前を…！

「え…と、あなたの名前は？」

「……かた……」

「え？」

「宗像…形……」

「……」

宗像？ 宗像って言いました？

まさかの原作組… 宗像形ですか！！？

「…君は？」

「うえっ？ わ、私は、川那九十九…です？」

「ふうん…」

何だよ！ 自分から聞いたくせにつ！
だがそこもイイ！ 宗像君は私のランキング2位なんだっ！

「宗像君は何でここにいるの？」

「お母さんのともだちに会いに来たんだ」

「へえ… いつまでここにいるの？」

ちょっと好奇心で聞いてみた

「…いつしゅうかん」

「いつしゅうかん… 事は明日もいる？」

「まあ…」

「じゃ、明日から遊ぼう！」

今自分でも思っただ事があるよ。

『唐突だな… 自分』

つて… okしてくれるわけないよねー

「…いいけど」

ほら、だm…

「いいの!？」

いいのかよ!？ 突然話しかけてきた奴だぞ!？
まあでもいいんだ! よっしゃっ!!

「きみから聞いてきたじゃないか…」

「あ、それもそうだ。

ていうか本当にあそんでくれるの!？」

「う、うん…」

あ、ヤベッ

宗像君引いてるわ。ドン引きかな？

「ごめん、ごめん… ちょっと何か憑いちゃったみたい」

「憑く…？」

文字ネタがわかるとは！
宗像形、侮り難し！

「ナンデモナイヨー。えへへー」

「…そう… ならいいけど…」

「じゃあ、そろそろ帰らなきゃ！
またあした、ねー！」

「…うん、またあした」

と言い、その日は別れた。

… 『またあした』って言ったとき、なあーんか笑ってたような…？

…まあいいか。

宗像視点

へんな子だったな…

かわなつくも…だっけ

…ひょつじょうがコロコロ変わるし

見てておもしろかったな… あれは…

…でも、あの子…

なんか、僕と似ているような気がする

…そんなわけないか…

第三厨 殺人衝動と厨二幼女の邂逅！（後書き）

…ふひはは

「私が自分の異常さを（若干）自覚するの、今回じゃなかったな」「
いわないでくださいよ！ もう！

「あはは、ごめんごめん。

悪気はあったんだ 物凄く」

鬼畜！ ドS！ 鬼！

「hahaha！ 褒め言葉だよ！」

畜生め…

「ていうか三点リーダー使いすぎじゃね？

あと短い」

そう言う事言わないの！！
頑張ったんですよ私も！

「…嘘くさっ」

九十九さん酷い

次回こそは頑張るですよ…

では次k…

「次回予告！」

宗像君と私が遊んだりして仲良くなつて

宗像君が自分の異常さを語りだす！

そして私は（やっと）異常さを（若干）自覚！

次回！

「普通？ 異常？ そんなのどうでもいい！！！」

乞うご期待！」

…次こそは、予告通りに…っ！

第四厨 普通？ 異常？ そんなのどつでもいい！！（前書き）

ふははひ

「またか」

あら九十九さん

「口調おかしくね？」

だって、物凄く驚く事があつたんですよ？
おかしくなるのなんて…当たり前じゃないですかっ

「何があつた？」

アクセス数がねー

「アクセス数が？」

…1200hitだったんですよ

「まじかよ！！？ すごいな！」

本当ですよ。私なんてこの連載始めた時

『そんな見ないよなー、あはは』
とか思ってたのに。

「えー…」

気を取り直して、1200hit有難う御座います

「…！」

これからも頑張るですよー

ではごっごー

第四厨 普通？ 異常？ そんなのどうでもいい！！

やあやあっ！ 幼稚園が終わった九十九ちゃんだよっ！

不知火とか不知火とか不知火とかがすごい可愛かった九十九ちゃんだよっ！

…ゴホン、失礼！

今から宗像君と遊ぶからテンソン上がっちゃってっ、てへぺろ

ちなみに私は今公園に向かっているよ！

いやー宗像君と遊べるとはねーもう死んでもいいよ…

…いや駄目だろ。駄目だもっ、宗像君と遊べるのが嬉し過ぎて色々おかしいよ私

お、公園に着いたようだよ

誰に向かって話してんだろっね？ …まさか宇宙人！？
いやそんな事は無い…といいなあっ

てか宗像君どk…

「…何してるの?」

「うにゃあああああああつっ!?!?」

うしろだと!?

ビックリしてへんな猫みたいな感じなつちやつたよっ!

「…ねこ?」

「む、むなかたくん…ビックリしちゃったよ、もっ…!」

いやもうホントビックリしたわ

「…じゅん」

「今の間は何でせうか?! そしてなぜ若干笑いをこらえて!?!?」

「…遊ぶんじゃないの?」

「あ、そうそう! 遊ぶんだっ!」

…ん? なんか話そらされた?

…よくわからん！ まあいいか！

「よし！ 何して遊ぶ！？」

「決めてなかったんだ…」

そこは「愛嬌」で。

この日はブランコ乗ったり、ぼーっとしたり、そこらの子供と遊んだり

それでもう夕方なんだよね…

「時間経つのはやいねー」

「おばあちゃんみたいなこと言っつのはやめてくれるかな？」

「えへへ、はい」

「…そろそろ帰らなくていいの？」

「うわおっ！ 忘れてたっ！

じゃー形君、またあしたっ！ ばあいつ！」

あ、遊んでる時にね、名前でいいって言われたのよねー
可愛かったよ、照れてたからっ

「…うん、またあした九十九ちゃん」

かわい い い ！ ！

そして名前ッ！！ うれしす！ ふはっ！

そんで次の日も

形君が背後から来たり

その次の日も

真横に形君が居たり

…色々と楽しかったですぜっ！ ビックリしたけどね！

で、もう遊べるのが最後の日…

…時間経つのがホントはいいよね

ちなみに今はシャボン玉やって遊んでるっ！
楽しいね！ シャボン玉！ パンってねっ！

「おおおっ…！ わ、わりたい…！」

「わってもいいと思うよ…？」

「な、なんですとうっ！？ わ、わってもよろしいので…？」

「い、いいけど」

「やったー」

ん？ 形君？ 何故にその様な微笑ましい表情なんだい？

とか思ってるけど、形君が吹いてくれるシャボン玉わってる私！
矛盾？ 矛盾？

私がシャボン玉わっていると、形君が

「…ねえ、九十九ちゃん」

「ほい？」

「…ちよつと話してもいいかな？」

と、言った。

私は若干不思議に思ったが

「…いいよー」

と気の抜ける返事をした、テへ

形君が口を小さく開いた、そしてこう言った

「…僕は、人を見ると『殺したく』なるんだ。殺したく無いのに。」

「…」

私は少し驚いた

自分の異常けいくん アブノーマルの事を話したんだから

「…殺したくなるの？」

「うん、とっても」

「…ふうん… そうなんだ」

私は、形君の次の言葉に一番驚いた

「…九十九ちゃん、きみも、僕と同じなんじゃないのかい？」

形君が、そう言ったから。

でも何故か私は冷静だった

「…なんで、そう思ったの？」

私はそう形君に聞いた

「…なんとなく、そう思ったから。」

「…そっか」

「…九十九ちゃん、僕の事、怖がらないの？」

「え？　なんで？」

って言ったら、形君は鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をした

何故に怖がるの？

「え、殺したくなるんだよ？　ふっつは…」

「…私は普通だけど、形君のそれは才能みたいな物だよ？　多分」

「さいのう…？」

「さいのう？　ん？　才能…だと思っよ？？　私は」

って言ったら、形君は少し安心したような顔をした
ああもう可愛いなこの野郎ッ！

「…そっか」

「？ うん」

「あ… もうこんな時間」

「ああっ！ ホントだ！」

「…じゃ、今日でお別れだね」

「うん、でも、またどこかで会うかもねっ！」

「そう…かも、ね」

「じゃ！ またね！」

「！ …うん、またね」

私たちは別れを言い、互いに帰って行った。

私は帰り道で色々考えていた、異常な事とかね！

「…んーんーんー、私、やっぱり異常なんだかねー…？」

「…まあ、少しは、異常かもね」

「…あー、今日のご飯は何だろなあ」

最終的に晩ご飯の事にいったが。

第四厨 普通？ 異常？ そんなのどうでもいい！！（後書き）

無理矢理詰めちゃった…

「だな」

まあ… 九十九さんも若干自覚したようだし…
いいか。

「いいのかよ!？」

いいんですよ別に。

さて、他に書くこともないし。

九十九さん、よろしくお願いします。

「あーっ！ 次回予告！

遂に私は黒歴史量産所くろしちりょうさんじょを卒業！

他はよく分からない！

次回！

「黒歴史量産所なんぞ滅べ!!」

一応、「ご期待！」

ふはは… 辛いよ

第五厨 黒歴史量産所なんぞ滅べ！！（前書き）

どうも、思いつきました（？）
短くなりそうでふ！

ではござー

「の、前に」

何ですか…

「嫌そうな顔すな。」

お前さ、私の幼稚園時代書いてる時

自分の時おもいださ」

はじまりです！！！！！！！！

第五厨 黒歴史量産所なんぞ滅べ！！

どうも、Mr.殺人衝動こと宗像形に出会ってから三年が経ちました！

…ハヤイ？ そんなこと言わないで！

この三年間は不知火とか不知火とか不知火とかと遊んでばっかだったの！

しかも不知火（怒らせて）喰われかけたし！ 怖っ！ トラウマものだよ！！

しらん… 半袖と仲良くなったけどね

名前呼んでいいって！ ひゃほう！ テラうれしす！

そして皆さん（？）に重大なお知らせ！！

今日！ 私は！！

黒歴史量産所、もとい幼稚園を卒園します!!

Yesッッ!! やっと! S O T U E N だぜ!!

ぴゃあああああああああ^p^

…ハッ! 失礼、我を忘れていた

で、今卒園式が終わったよ

もう? とか言わないでくれよ?

心の中で独り言を思っていたら

「あひゃひゃ! なにしてんの?」

「あいつ!?! …なんだ半袖か… ビックリさせないでよっ!」

そう言つと、半袖はきゅぽきゅぽしながら

「あひゃひゃ！ ごめんね九十九」

と、言った

…名前…ッ！ 嬉しいよ…！

…そついや形君の時もこんな事あつたな

ハッ！ これがデジャヴという奴か！

成程！

「九十九？」

「あ、ごめん。何？」

「あたしはもう帰るけど、また遊びに来なよ」

「うん、ありがとね」

「んじゃバイバイ」

「ばあーい」

そして別れた。

…あっさりしたお別れでした(´・・・)

「九十九ちゃん！ 帰りましょうか？」

「はいっ」

…さてと、私も帰るかねー

形君どっかにいないかなー…

第五厨 黒歴史量産所なんぞ滅べ！！（後書き）

はい、短いですねー

「だねえ」

次回から九十九さんの小学校時代の始まりですよ

「お、まじか」

原作組の住んでいる所とか、卒業した小学校が分かんないので適当につくります。

「それでいいのか？」

いいんですよ。

世の中適当にやっていたら何とかかなりますから。

「駄目人間！！」

人間は遅かれ早かれ駄目に成る様に出来てるんです。では九十九さん、次回予告を！

「へいへい、次回予告！

私が小学校に入学！

其処でまたしても原作組に出会う！

そして（忘れられていた）人外が現れる！

次回！

「私と入学と原作組と！+」

乞うご期待！」

頑張るですよー

第六厨 私と入学と原作組と！ + (前書き)

浮！ 巡！ サティスファクション！！！！

「何だぁ！？」

いやですね、秋 音さんの浮巡サティスファクションを聞いてるんですよ。

いいですね。秋 音さん。

「あ、そう…」

さて、テンションも上がった事ですし
本編どうぞー

「ぶっぞー…」

さて、入学式も終わった

後は… クラスかあ…
メンドクサイ…

「九十九ちゃん、行きましようね」

おかーさん、久々の登場ですね…

「あー、うん」

ダリイ… ツツ!!

教室だZE

おー… 懐かしや教室…
ここに来る前はちょうど中学入学したばかりだったからな

「しつれーしまーす…」

おお、人だらけ子供だらけ…

…当たり前だよ、最近大丈夫か、私！

教室の扉の前で突っ立てると
茶髪のちびっ子… まあ私もただけだね？ …とぶつかつた。

「わっ！」

「わお」

「いてて… ごめんね？」

「あ、別に怪我してないし… 君こそ大丈夫？」

「あ、うん」

…んー？

この男の子どっかで見たような…？

「む、善吉、何をしている？」

「あ、めだかちゃん！」

…ぜんきち…？ めだか…？

「この子にぶつかっちゃって」

「そうか、おい貴様」

「え？ あ、何？」

「善吉がすまなかつたな。私の名前は黒神めだかだめだかちゃんと呼ぶがよい！」

「え、あー…うん」

えー…？ この子完全にめだかちゃんじゃーん…

まじかよー！

…ん？ じゃあこっちの子は…まさか

「ぼくは人吉善吉だよ！ きみは？」

善吉キタ

ちっちえ

！！
！！

「？ ねえ」

「あ、うん？」

「きみのなまえは？」

「あー、私は川那九十九だよ。」

「よろしくね、善吉君にめだかちゃん」

「よろしくね！ つくもちゃん！」

「よろしくな、九十九」

「うん」

で、色々あってその日は別れた。

帰り道ッ！

私はめだかちゃん&mp・善吉君の事を
おかーさんに話していた。

「今日ね、めだかちゃんと善吉君っていつ子と
友達になっただよ」

「もうお友達が出来たの〜？　すごいわね〜」

たまあーにイラツと来るんだよね…

この喋り方…

とか色々話していると

「今日は九十九ちゃんが入学したお祝いに
ケーキ買いに行きましようか〜」

と、おかーさんが言った。

たかが入学で!!!?

と思ったが言わなかった。
だってケーキ食べたかったんだもんッ

そしてシャトーゼ。

…妙に細かいよね、とか言っちゃ駄目だよ？

「九十九ちゃんは何がいいのかしら〜？」

「チョコレートケーキッ！」

「あら〜そう〜　じゃあチョコレートケーキにしましょ〜ね〜」

おかーさんがお会計しにいった。

私はチョコレート見てたけどね？

…私がテンション上げながらチョコを見ていたら

「やあ、久しぶりだね」

と、肩を叩かれた。

後ろに振り向くと

あんしんいんさんが居た。

…ケーキの箱を持って。

第六厨 私と入学と原作組と！ + (後書き)

はい、切っちゃいました

「まさかあんしんいんさんが

シャトーゼに居るとはね…」

多分安心院さんもケーキ食べたかったんでしょう。
そう言う事言わないであげてください。

「まあ…」

では次回予告ーっ！

「あいよーっ、次回予告ー

まさかのシャトーゼにあんしんいんさんが！

そのあんしんいんさんの登場で私のテンションは急降下！

次回！

「私とあんしんいんさんとぶっ壊しツツ…！」

乞うご期待ー」

何時になくやる気の無い九十九さんでしたー

…次回、27日位になりそうです。申し訳ないです

第七厨 私とあんしんいんとぶつ壊しッ！…！（前書き）

はい、お久しぶりです

「ホントだな」

…忙しかったですよ。かなり
今日は髪切りに行っだし…
切るのに35分かかって、何、私

「天パと言うか、寝癖と言うか…」

ふはは、仕方ない。

そう、仕方ない事なのですよ…

「おい…現実逃避なのかソレは？」

まあいいか。第七厨始まるYO！」

ウザいですねー…

第七厨 私とあんしんいんとぶっ壊しッ！

えー、皆さんにお聞きしたい事があるんですが…

突然、『やあ、久しぶりだね』とか言われたらどうしますか？

私はまず固まりますね。ハイ…

…っつーか何？ なに？ 何なんですかあんしんいんさん！

ストーカーかよ！！ もう！ 怖いわ！！

…スマソ^p^ ちょっとね、あんしんいんさんがね、うふふ

分からない方は前の話を見てネ

「なんで僕の顔を見てそんなに嫌そうな顔をするのかな？」

「純粹にあなたが苦手だからです。」

あんしんいんさんとかもう嫌でふ^p^

「…にしても本当に久しぶりだね、九十九ちゃん」

「私とあなたはいつからお友達（笑）になったんですか…」

「三年前位から」

なつた覚えが無えんだけど。

「ははは、相変わらず面白いね」

「さいですか…」

ヤバイよー、私のテンソンが駄々下がりだよー…
私のアイデンティティーが消えるつつつつっ！！

「で… あんた… あなたは何しに来やが… 来たんですか？」

ヤベエヤベエ、口調が

「素のままでもいいけどね。うん、僕はただケーキが食べたかっただけだよ。」

「ババアの癖に女子高生気取りっすかー（棒読み）若作りは大変だあー（棒読み）」

「君口悪いね。後、誰が婆だって？」

「何でもねエッス。」

ぴゃあああああああああ^p^

あんしんいんさんワロスww 無視してればいいのに反応するとか

www

もうホント駄目ポ！ww ふひやはははwww

…あ、ヤベツ。私の素が出てきた…

「……九十九ちゃんさ」

「はん？」

「態度悪いね… 九十九ちゃん、箱庭学園って知ってる？」

何だこの人、唐突だな。

「知ってますけど」

…もう何かメンドクサイわ。全部喋ったろ。

「箱庭学園てアレっすよねー、全校生徒を犠牲にして『天才』を作るつとしてる

…まあ、実験場みたいな所っすよねー？」

「！！！」

「おーおー、バケモン人外が驚いちゃって、まあははは、笑える。」

「…何で知ってるのかな？」

「あはは、何でっすかねー？ まあサイティン・パーティー十三組の十三人とか物凄いネーミングセンスですね私ビックリしちゃったー（棒読み）」

「なんで、そこまで…！」

「ははは、あんしんいんさんも大変っすねー、自らスカウトとかまあでも流石、箱庭学園創設者にしてフラスコ計画の立案者！そして平等なだけの人外！」

「はは、流石流石！ 7932兆1354億4152万3222個の異常性と4925兆9165億2611万643個の過負荷合わせて1京2858兆519億6763万3865個のスキルを持つ人外！面白い面白い！…あれえ？」

「そういえば不知火半纏さんが居ませんねーどうかしたんですかー？半纏さん。」

「これじゃあ『僕』を七億人連れて来ても私には勝てないっすよーあはは」

「ッッ……!!!!?」

ふは、ビックリしてるー。

…ははは、何つーかまあ…

「化け物が人間みてえに驚いてんじゃねえよ。」

気持ち悪い、そう言ったらあんしんいんさんは絶望に満ちたような顔をした。

ははは、人外を自称してる癖にメンタル弱いなー、くっだらねえー

…あ、おかーさん、会計終わったっばいなー。

この自称人外は呆然としてるし… 行くか

「サヨウナラ安心院なじみ、できれば二度と私の前に現れないでくれると嬉しいな。」

…あ、後ー、私はあんなフラスコ何かに収まるほど…小さい存在じゃ無いからね。」

と、私は言い、母親と共に店を出た。

…帰り道、私は母親に色々聞かれたが適当に誤魔化した。

…にしても、あの自称人外… つまらねえ女だったなー…
アレで自称最強？ はは… つまらねえ、つまらねえ。自分以外は
全員平等にカスとか。
驕りが過ぎるぜ。あの女。殺したい所だったけど…原作に影響する
しね…

ああーあ… どうせまた現れるんだろうなあ。

…まあ、そんな時までには色々直っていればいいけどね…

安心院なじみ視点

…何だよ…あの子…!!

『人間みたいに』？

僕が、あんなカス共と同じだって？

ふざけるなよ…!! 川那九十九…!

僕は必ず君をフラスコ計画に入れてみせるからね

待ってなよ、九十九…

第七厨 私とあんしんいんさんとぶっ壊しッッ!! (後書き)

… 九十九さん毒舌ですねー

「仕方ねえだろ？」

この性格の元はお前何だし。

毒舌なのは当たり前だろ？」

ちよっ！ 私が毒舌みたいな言い方しないでくださいよ!!
私は毒舌では無 ……いい…善です…!!

「毒舌だって…

だって昨日も普通に『いいよ別に、どうでも。』って言ってたじやん…」

仕方ないじゃないですか… 鬱陶しかったんですよ…

「めっちゃ傷ついてたぞアイツ」

いいんですよ、どうぞ忘れてます。
さて、ここら辺で次回予告!

「いいのかよ… 次回予告!

めだかちゃんやら善吉君やらとほのぼのしてるだけ!

(多分) そんなに重要な事は無い!

次回!

「私の日常! 読み飛ばし可!」

あんまり期待しなくてもいいです!」

です。

第八厨 私の日常！ 読み飛ばし可！（前書き）

お久しぶりです

「あけましておめでとござーやすつ」

ダレてますねえ…

「正月くらいはいいじゃんよ…」

こたつでぬくぬくしないでください。

…九十九さんのやる気がないので、パパッと始めたいと思います。

あ、後、私のやる気も無いので、一気に
6年生まで飛びます。てへぺろ

第八厨 私の日常！ 読み飛ばし可！

川那九十九（主人公）の日常

月15日火曜日

A M 6 : 0 0 起床

A M 6 : 2 0 母親 & a m p ; 父親と朝食

A M 6 : 3 5 支度、着替え

A M 6 : 4 5 学校へ

A M 7 : 0 0 到着、委員会活動 ・九十九さんは美化委員長

A M 7 : 4 5 朝の会

A M 8 : 0 0 読書

A M 8 : 1 0 授業開始

ちなみに午前授業は

1 時間目 国語

2 時間目 算数

3 時間目 美術

4 時間目 総合授業

です。

P M 1 1 : 5 5 授業終了

P M 1 5 : 3 0 帰りの会

P M 1 5 : 1 0 授業終了

6 時間目 音楽

5 時間目 理科

午後授業は

P M 1 3 : 0 0 授業

P M 1 2 : 4 5 清掃

P M 1 2 : 2 5 昼休み

P M 1 2 : 1 0 昼食

P M 15:40 放課後

P M 15:45 委員長会議

P M 16:15 委員長会議終了

P M 16:30 帰宅

P M 18:30 夕食

九十九さんは基礎能力を上昇させる為に何かしらやっています。

P M 20:00 お風呂

め「何故嫌がるのだ…」（シユン）」

九「シユンとしても駄目なモンは駄目」

第八厨 私の日常！ 読み飛ばし可！（後書き）

書き方が分からなかったです。

「つか委員長会議が長い」

そういえば、九十九さんは児童会長もやっているらしいですね。

「タリイ」

そう言う事言わずに。まあいいですが…

あ、これを見てくれている皆様に結構重要なお知らせです。

「どうした？」

えー、私の残念な脳味噌ではスキルや、スキルの名前等が思いつきません。
なので

『仕方ない、私（俺）の考えた奴をやるうじやないか。』

と言う方はバシバシ送ってください。本当に。
いつでもお待ちします。

「キリのいいところで次回予告。

物凄い飛んで小学生時代終了！

次回！

「小学生の次は…!？」

乞うご期待！」

では、今年も宜しくお願いします。

第九厨 小学生の次は……！？（前書き）

この話で九十九さんに大事件が。

「ええええええええええ！？ …… って感じだったよ……」

大した事件でもないですけどね？
ではどぞっ

「大した事件だぞ。 私にとっては！」

そですか……？

えへへ、でもね、なぜか、卒業の言葉？　って言うの？
を、言わなきゃ駄目なんだってっ！　死ぬわ！！

私のチキンハートなめんなよこの野郎共めがああああああ
！！

もう嫌ああああああああっ！！　穴があつたら入りたいて奴
ですわ！

今ならその気持ちわかるよ！　ええ、わかりますって奴だぜっ！！

『卒業生代表、川那九十九さん』

「はい」

呼ばれた…　行きたくない…　けどこの足は前へ進んでいるっ！
考えてることやってている事ってたまに矛盾するよね！

じゃあ、逝って来ます

壇上と言う名の戦地へ…

やっと帰れるうー　とか思った自分馬鹿だ、まさか……

「先輩、行かないですよ」

「ふええええん」

こんな事になるなんてッ……！

「あはあはっ……」

さすがのおかーさんもビックリしてるぜ…
私もビックリしたけどな!?

だって帰ろうと思ったら後輩達（主に委員会とか、児童会とかの）が

「行かないでください」

てな具合に泣いてんだぜ？ 滅茶苦茶ビクツたわ！
…つか早く帰りてえんだが。どうしたらいいの…？

「皆、また会えるから、先輩困らせちゃ駄目でしょ？」

「だって晶あきあ…」

「だってじゃ無いっての…」

この子は… あ。

「晶ちゃん」

「どもつす、先輩。卒業おめでとつございます」

今年で六年になる、紙守晶かみもりあきちゃんじゃないか。

よく分からなかったよ… 大丈夫か、私。あれ？ 何これデジャヴ？

「先輩？」

「うにゃ？ あ、ごめんごめん。ありがとね。」

「猫っすか…？」

「あはは、たまにこうなるんだ。」

「この子、ちょっとだけ私に似てんだよねえ…
私と違ってめっちゃいい子だな！」

「九十九ちゃん、そろそろ行きましようか。」

「あ、うん。つつー訳でまた仕事ぶりを見に来るからね。」

「これ言っとけば大丈夫だろ… 多分。」

「つつ… 絶対ですよ？」

「私が嘔吐くだけでも？」

「たまにめっちゃ性質タチ悪い嘔吐しますよね。」

ぬうつ… 彼奴、中々やりよる…

「まあまあまあまあまあ、それはちょっとしたオフザケだよ」
って言っといた。

そしたら、性質ワリイって言われた。先輩悲しいっ！
その後ちよつと駄弁ってた。

で、もう帰る時間。

「じゃあ、またな〜」

「はいっ」

「晶ちゃん、児童会長よろしくね〜」

「はい、今までありがとうございます」

「じゃな〜」

こうして私は無事、小学校を卒業いたしました。チャンチャン

めだかちゃんと善吉君とかと喋ってから帰りますた（．．）

自宅ッ！

今、唐突に思ったことがあります。

『そついや中学どこだ?』

忘れてたよ。てへぺろ

中学の事を考えてたら、おかーさんが来た。後ろから。
今日デジジャヴ多くね?

「んで? どうしたの?」

「実はね〜…」

んああ!! いいから言えよ!!
私、回りくどいの嫌いなんだよ!!!!?

その次の瞬間、母親の口から出た言葉に、私は固まった。

第九厨 小学生の次は……！？（後書き）

はい、事件とはこの事なのです！

「呆然としちゃったよ……」

ですね。私はどうでもいいですケド。

「おいおい」

では書く事も無いですし、次回予告っ！

「あい。次回予告ー！

私、九十九まさかの引っ越し！

私はどう言っのか！

次回！

「どっしり……部屋汚い。」

乞うご期待！」

頑張るですよー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6078z/>

厨二病少女物語 in,めだかボックス

2012年1月6日11時52分発行